

## V25b 鹿児島大学 光・赤外線望遠鏡 赤外線カメラ立ち上げ

渡部 裕貴、面高 俊宏、河南 勝、前田 利久、太田 敬、高橋 洋一、宮原 豪 (鹿児島大理)、小林 秀行、廣田 朋也、藤井 高宏 (国立天文台)、田中 培生、本原 顕太郎、大藪 進喜 (東大理)

鹿児島大学理学部は、国立天文台 VERA 計画と協力して晩期型星 (AGB 星) の周期光度関係の検証・質量放出現象を解明する為に口径 1m の光・赤外線望遠鏡を建設し、観測装置の開発を進めてきた。観測装置は今まで使用してきた可視 CCD カメラに加え、今回メイン観測装置の赤外線カメラ (IRlaboratory 製) を搭載した。これにより、可視領域から近赤外線領域まで幅広い波長で観測を行う事が可能となり、銀河系内の可視ミラからダストで被われた OH/IR 星まで幅広く多くの天体を観測対象とする事が出来るようになった。

赤外線カメラの検出器には、HAWAII アレイ (HgCdTe 512x512 画素) を用いており、 $5'.5 \times 5'.5$  の視野を持っている。さらに、フィルターは通常の広帯域の  $J, H, K, K'$  の 4 バンドを持っているが、これとは別に 4 枚のフィルターを増設する事が可能である。カメラ制御はリーチコントローラーが用いられており、現在 Linux ベースの制御ソフトの開発を進めていて、完成すると自動観測が可能になるので観測効率が向上し、複数のバンドの観測でも一晩に約 300 天体以上は可能になる。

本講演では、赤外線カメラの立ち上げ、測光性能、当サイトの観測条件、観測システムの開発と、今後の観測計画について報告する。